



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	(書評) 藤井 光 訳 スティーヴン・クレイン 著 『勇気の赤い勲章』 (光文社古典新訳文庫、2019年10月20日発行、281pp. 880円+税)
Author(s)	瀬名波, 栄潤
Citation	北海道アメリカ文学, 36, 66-75
Issue Date	2020-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86197
Type	journal article
File Information	senaha_HAL_36_66-75.pdf



【翻訳書】

藤井 光 訳

スティーヴン・クレイン 著

『勇気の赤い勲章』

(光文社古典新訳文庫、2019年10月20日発行、281pp. 880円＋税)

瀬名波 栄 潤

藤井光の挑戦は続いている。今回は古典作品。Stephen Crane (1871年11月1日－1910年6月5日) の *The Red Badge of Courage* (1895年) の翻訳だ。アメリカ文学を代表するキャンノンである。日本語訳としては、これが5版目。古い順に紹介すると、①林信行・横沢四郎(新鋭社、1956年)、②西田実(岩波書店、1974年)、③繁尾久(旺文社、1977年)、④谷口睦男・沢田和夫(八潮出版社、1984年)。本書は、直近の翻訳書から35年を経ての古典新訳になる。

今回の出版で、藤井は三つのことに挑戦した。文学史の更新、既存翻訳の更新、そして過去の自分との対峙である。まず、研究者藤井の文学史観。一般的に、翻訳書は、原書の訳文に加え、作家の紹介と作品の解説、つまり文学史観を巻末に添えて出版される。これらの文学史観は、日本人読者が作家や作品の背景を学ぶ上で重要な情報を提供する。同じ作品の翻訳書が何版もあるのなら、それぞれを比較することで、作家論や作品論の変遷を学ぶことができる。これまで翻訳書の解説では文学史を語ることが少なかった藤井にとって、19世紀に遡ってアメリカの文学を概観するのは初経験だ。しかも、通常の学術書や論文の執筆とは異なり、商業翻訳書での文学史提供ならなおさら難しい。必ずしもアメリカ文学を専門としない一般の人々に、藤井のアメリカ文学史観をわかりやすく語る必要があるだけでなく、そういった読者達に今後長い間スタンダードなアメリカ文学史として記憶に残るからである。次は文芸翻訳そのもの。100年以上も前に書かれた作品を、現代日本人読者仕様に更新する翻訳作業だ。藤井の場合、これまで最新の英語作品を発掘・翻訳し、日本にはまだ馴染みの薄い作家や作品を紹介する最先端の水先案内人の役割を果たしてきた。今回は逆だ。

すでに60年以上に渡って多くの日本人が慣れ親しんできた作品に、今さら、つまり最後尾から挑むことになる。これも藤井にとって初経験の挑戦だ。三つ目は、大学院生時代にこの作品に出会った藤井が、自らの成長の軌跡を振り返るという挑戦である。

きっかけは、光文社の編集者が持ち込んだ。「訳者あとがき」にあるように、「好きな古典作品を何か選んでもらえませんか、と今野さんに言われたとき、僕の頭にまっさきに浮かんだのが、クレインのこの小説だった。」(279-80)。「ストーリー以外の細部に不思議な描写の多い、謎めいた小説として記憶に残っていたからである。『男らしさ』をテーマとするそのゼミで、一学生として学んだときの記憶と再会するようにして、僕は本書の翻訳に取り組んだ」(280)という。今回は、文学史と翻訳の更新という二つの挑戦に加え、学生時代に感じた「謎めいた小説」を解きほぐすという三つ目の挑戦を自らに課して始まった。

まず先に、既訳書の「解説」と比較してみる。それぞれの翻訳書には、翻訳者や出版時の文学史観が反映されている。まず、一番古い①は、「お上品な伝統」の文学の破壊として1890年代にアメリカの現代文学は始まったとし、その開拓者の一人がクレインと位置付ける。作家の感傷を捨て去った客観的な態度と印象的な描出方法を称え、自然主義的考え方に注目している。が、参考文献への言及はなく、訳者の筆致も印象的だ。②は、「クレインの生涯」で、作家の独特の色彩感覚や印象主義的な技法に言及しながら、他の作家も紹介している。ポー、トウェイン、ハウエルズ、ディキンソン、キャザーなど多彩だ。そして「作品について」では、戦場における兵士の心理分析に着目し、自然と人間との関係つまり心象風景を説明する。そして、「戦争文学史上の画期的な傑作」(356)と位置づけている。興味深いのは、イギリス版初版の表紙絵を紹介しており、それが喜多川歌麿の「琉球人行列図」(1804年)ということ。「1890年代にはイギリスでも浮世絵がもてはやされていた事実を反映するもの」(363)としており、日本人読者の興味を引くエピソードを提供している。③の伝記情報はかなり詳細だ。「作品の傾向」でも、「お上品な伝統」が崩れた背景や自然主義リアリズムの勃興が丁寧に説明されており、様々な文学者が登場する。また、構成と作中人物も細かに分析しており、作品論として充実している。同時

代の他作品も並置した年譜もある。英文の参考文献も最後に6冊紹介している。また、訳文中にはいくつもスケッチが挿入されており、少年文学の様相もある。幅広い読者層を想定しているようだ。④は比較的小コンパクト。作品解説にはヘミングウェイが登場し、本作品を戦争文学の系譜で紹介する。しかし、③ほどの細かな分析はなく、参考文献もない。

藤井の「解説」は全20ページと1行。これまでの翻訳書のどれよりも多く、21世紀から観るクレイン像を描く。それは、「作家になるまでの歩み」、「『勇気の赤い勲章』について」、「『勇気の赤い勲章』発表後のクレイン」に分けて紹介される。参考文献は11冊、うち6冊は日本人研究者によるもの。21世紀の研究者では、Paul Sorrentioに加え、斎藤忠志、諏訪部浩一、新田啓子が並ぶ。最新は、阿部幸大が2015年に発表した論文である。そして、6ページの「スティーヴン・クレイン年譜」が続く。

「解説」の最後に、藤井は本作品には「のちのアメリカ合衆国の戦争文学に繰り返し回帰することになる主題が凝縮されていることも重大な点」と指摘する。主人公ヘンリー・フレミングと戦争の関係は「ジョーゼフ・ヘラーの『キャッチ=22』やトマス・ピンチョンの『重力の虹』、さらにはベトナム戦争を主題とする文学によって21世紀にも引き継がれていくことになる」(267)と総括する。研究者藤井の分析を通して、19世紀末に書かれたクレインの作品が今日に至るまで強く影響を与えていると言う文学史観が見えてくる。結果、ポストモダンを生きてきた中高年の読者層をマーケティング対象とした光文社の戦略に応える解説にもなっている。そして、藤井個人に着目するならば、彼がこれまで築いてきた翻訳ジャンル「戦争文学」の原点に、スティーヴン・クレインの作品があることも見えてくる。

この後の「訳者あとがき」によると、翻訳には2010年代の規範を用いたという。具体的には3点。まずは語りの手法。1人称をやや多めに用いたらしい。原文では3人称であっても、内的独白に近い文章であれば第1人称「おれ」を用いたそう。2点目は時制。過去形でも、その文章における臨場感やスピード感などが重視されるべきと思った場面では現在形を採用した。3点目は会話。方言の使用を控え、登場人物の出自よりも人物像の描写に力を注いだ。ここでは、5つの翻訳版を具体的に比較検証してみる。

まずは、第1章で、息子を送り出す母親のセリフ。朴訥だが愛情に溢れている。原文の口語表現は、既訳書では訛りで味わいを持たせているものがある。だが、藤井の場合は方言ではなく現代の標準語で、母親の息子に対する愛情を際立たせる手法を選んでいる。

原文 “I’ve knet yeh eight pair of socks, Henry, and I’ve put in all yer best shirts, because I want my boy to be jest as warm and comf’able as anybody in the army. Whenever they get holes in ’em, I want yeh to send ’em right-away back to me, so’s I kin dern ’em.

① おまえに靴下を八足あんでおいてあげたよ、ヘンリ。それに上等のシャツも入れておいたよ。私は息子には軍隊中のだれより暖かく気持ちよくしててもらいたいからね。穴があいたらすぐに送っておくれ。そうすればわたしがなおしてあげるから— (13)

② 「靴下を八足編んどいたよ、ヘンリー。それからあんたのいちばん上等のシャツも入れといたよ。軍隊のだれにもひけをとらぬよううちの息子には暖かく気持ちよくしててもらいたいからね。穴があいたらいつでも送ってよこしな。つくろっておくからね。(13)

③ 「くつ下を八足編んでやった、ヘンリー。シャツもいちばんいいのを入れてやった。おらの息子には、部隊のだれにも負けねえように、暖かく^{あつた}楽にしてやりてえだからな。穴があいたらいつでも、すぐ送り返しておくれ。かがってやっからな。」(13)

④ 「靴下を八足編んでおいてやったよ、ヘンリー。シャツも一番好いのを全部入れといた。せがれにはほかの兵隊に負けないぐらい暖く好い気持ちにさせてやりたいもんだから。穴があいたらかならず直ぐにおっかあのところ^{あつた}に送り返しておくれ。つくろってやるから。(12)

藤井訳：靴下を八足編んでおいたし、とっておきの肌着も入れておいたからね。なんたって、息子には軍隊のみんなと同じく暖かくて心地よくしてもらわなきゃ。穴があいたら、いつでも私のところに送っておいで。縫ってあげるから。(14-15)

第11章の以下のシーンは時制と人称が独特だ。藤井は現在形と主人公自らが語る第1人称を用いて、臨場感を出している。

原文 He had no rifle; he could not fight with his hands, said he resentfully to his plan. Well, rifles could be had for the picking. They were extraordinarily profuse.

Also, he continued, it would be a miracle if he found his regiment. Well, he could fight with any regiment.

- ① 彼は銃をもっていなかった。空手で戦うわけにはいかない、と彼は腹立たしそうに自分の思いついたことに対して言った。だが、銃なら拾えばいいだろう。それはどこにでもころがっている。

それに、所属する連隊を見つけだすことはとても難しいではないか、と彼はなおもつづけた。だが、それなら、どの連隊とでもいっしょに戦うことができるだろう。(117-18)

- ② 彼は小銃を持っていなかった。素手で戦えるわけではない、と自分の計画にむけて腹立ちまぎれにいった。だが小銃は拾うことだってできる。そこらにごろごろ転がっているぞ。

さらに彼は、自分の連隊を見つけ出すのは奇跡みたいなものだと思いめぐらした。だが、どの連隊とだって戦えるのだ。(99)

- ③ 彼は小銃を持っていなかった。素手では戦えない、と彼は自分の計画に向かってプリプリしながら言った。なに、小銃がほしけりゃ拾いさえすればいい。いくらでもごろごろ落ちている。

それから、自分の連隊を見つけることは、奇跡を待つようなものだ、と彼は考えを続けた。いや、どの連隊といっしょに戦っても構うものか。(107-08)

- ④ おれは銃を持たぬ、素手で戦争をするわけにはいかんではないか、彼は自分の計画に向かって、くやしそうに言って聞かせた。ふむ、ところで、鉄砲は拾えば、手にすることができるわけだ。そんなものは、いくらでもそこらにころがっている。

それに、と彼は続けて考えた、おれの連隊が見つかったら、それは奇跡というものだ。ふむ、それでは、他の連隊に加わっ

て戦えばよろしい。(87-88)

藤井訳：ライフルは持っていない。前線に駆けつけると言っても、素手でどうやって戦えばいいんだ。いや、ライフルは拾えばいいじゃないか。いくらでもあるんだから。

そもそも、自分の連隊を見つけるのは、奇跡でも起きない限りむりだろ。いやいや、どの連隊に入って戦ったっていいじゃないか。(124-25)

第12章では、外国語訛りの翻訳がポイント。藤井は、ドイツ系移民部隊のドイツ語訛りの英語の翻訳に苦勞したことを認めている。が、他の翻訳者たちがどの程度意識して挑んだかは不明だ。結果としては、訛りはどの版にも感じられない。そもそも、日本人に「ドイツ語訛り」と言ってもイメージが湧かないのだから、訳しても読者に理解してもらえるかわからない。アメリカ文化における異文化言語を日本語文化圏に翻訳することの難しさがここにある。

原文 They sometimes gabbled insanely. One huge man was asking of the sky: "Say, where de plank road? Where de plank road!"

- ① 時々、かれらは、狂ったように、早口で意味のないことを、しゃべった。柄の大きい男が、天空にたずねていた。「おい、棧道は何処だ？ 棧道は、何処なんだ？」彼は、まるで、子供を、なくしてもしたかのようにであった。彼は、苦痛と、落胆のうちに、涙を流した。(126)
- ② 彼らはときどき狂ったように訳のわからないことをわめきたてた。大男の兵士が空に向かって、「おい、板ばり道はどこだ？ 板ばり道はどこなんだ？」とたずねていた。その男はまるで子供をなくしたときのようなだった。彼は苦しみのあまりとり乱して涙を流していた。(106)
- ③ ときおり彼らは、気違いのようなたわごとを口にした。一人の大男が空に向かって、「おい、板張りの道はどこだ？ 板張りの道はどこだ？」と尋ねていた。それはまるで、子供を失くした人のようなであった、その男は、苦痛と心配とでおいおい泣いた。(115-16)

- ④ ときには、氣狂いじみた早口でぺらぺらしゃべっている者もあった。一人の大男は空に向かって求め続けていた―「おい、本道路はどこだ本道路はどこだ」まるで子供なくしたようだった。その男は、苦痛と狼狽のあまり涙を流していた。(94)

藤井訳：正気とは思えないような言葉を口走っている兵士もいた。ある巨漢は、空に向かってこう話かけていた。「なあ、板を張った道どこだ？板の道どこなんだ！」子供を見失ってしまったような口ぶりだった。その巨漢は痛みと動揺で涙を流していた。(133-34)

最後の第24章は作品のクライマックス。主人公の成長を示す哲学的論考として最重要な部分で見逃せない。ここで、藤井は「男らしさ」を前面に出した訳に仕上げている。

原文 With this conviction came a store of assurance. He felt a quiet manhood, nonassertive but of sturdy and strong blood. He knew that he would no more quail before his guides wherever they should point. He had been to touch the great death, and found that, after all, it was but the great death. He was a man.

- ① (前段落からの改行なしで) この確信と共に、かなりの自由が生れて来た。彼は独断的ではないが、剛毅で、激情的な落ち着いた男性を意識した。彼を導くものたちがどこを指示しようとも、彼らの前で怯むことはもはやないだろうと思った。彼は大義の死に到達するはずであったのだが、結局それはただ、大義の死に過ぎないということがわかった。彼は人間であった。(243)
- ② この確信とともにたっぷりした自信が生まれた。彼は自分が落ち着いた男に成長したことを感じた。それは控えめでこそあれ、しっかりとしたしんの強い感じだった。指揮官がどの方向を指示しようとも、もはや彼らの面前でひるむことはまずあるまい。彼はまさに偉大なる死に触れそうになった。そしてとどのつまりそれが単に偉大なる死にすぎないことがわかった。彼はひとかどの男になったのだ。(197)
- ③ この確信とともに、自信がわきあがってきた。彼は、静かな

成長を感じた。それは表面には出ないが、血の中にしっかりと強く流れていた。彼は、これからは、どの方向に行けと命令されても、もはや怯むことはないだろうと思った。彼は、大きな死に触れるために出て行って、結局、大きな死も、それだけのことであったと知って帰ってきた。彼は大人になった。(217-18)

- ④ その自覚とともに、豊かな確信が生まれてきた。彼は落ち着いた男らしさを意識した。それは独断的に自己を主張するものではなく、健全な強い活力に満ちたものだった。先導がどういう方向を目指そうとも、その前にたじろくことはあるまい。彼は偉大なる死に触れることができた。そして、それは結局、偉大なる死に過ぎないことを知った。彼は一人前の男であった。(176)

藤井訳：その確信とともに安心感がみなぎってくる。出しゃばりはせず、しかしたくましい、そんな静かな男らしさを感じた。たとえどこを指されて連れていかれたとしても、もう怖^{おし}気づくことはない。おれは大いなる死に触れに行き、それがただの大いなる死だと知った。おれはもう立派な男なのだ。(247)

最後に、邦題について触れておく。過去の翻訳書は、最初の三つはいずれも『赤い武功章』、最後の谷口訳が『赤い武勇章』としている。実在する勲章のような響きがある。つまり、藤井の「解説」にある「戦闘においてみずからの『男らしさ』を証明し、負傷という『赤い勲章』をもってその証とする（のちの戦争ではそれが「名誉負傷章」となる）」という、兵士たちのどこか神話的ですらある期待（266-67）、つまり実在しない「男らしさ」への憧憬がこの題目には漂う。1956年から60年以上、4種の翻訳書によって引き継がれてきたクレインの代表作、日本人読者に受け入れられてきた名著の日本語題名は、『赤い武功章』が定番になっている。それだけに、藤井の『勇気の赤い勲章』は気になる。

新しい邦題にした理由を聞いてみた。藤井によると、題名が作品の中で一度だけ使われている場面があり、その表現と題名を一致させることに注力したらしい。第9章のその原文と訳文（下線部評者）を見てみよう。

原文 At times he regarded the wounded soldiers in an envious way. He conceived persons with torn bodies to be peculiarly happy. He wished that he, too, had a wound,

a red badge of courage.

- ① ときどき彼は傷ついている者を羨ましそうに見た。彼は体をひきさかれた者たちが全くしあわせだと思った。彼は自分もまた負傷を、赤い武功章をうけていたなら、どんなに嬉しかろうと思った。(97)
- ② ときおり彼は、負傷兵たちを羨ましそうな目付きで眺めた。彼は、傷だらけの体を持った者たちは、さぞかし幸せだろうと想像した。そして自分も負傷したい、赤い勇気のしるしが欲しいと思った。(89)
- ③ ときどき彼は、うらやましげに負傷兵たちをながめた。引き裂かれた肉体をもった者たちは、ひときわ幸福なのだと思った。自分もまた傷を負い、赤い勇気の武功章⁽¹⁾を手に入れたいと願った。⁽¹⁾表題となった語句で、血によってあがなわれる勲章の意。
- ④ ときどき彼は負傷した兵隊をうらやましそうに見やった。肉体を引き裂かれた人々が、おかしいほど仕合わせに思えた。自分もまた傷を——いわば赤い武勇章を、身につけていたらよかったと思った。(72-73)

藤井訳：ちらちらと、傷ついた兵士たちに羨望の眼差しを向けた。深い傷を負った男たちはさぞかし幸せなのだろう、おれにも傷があればいいのに、と願った。つまりは、勇気の赤い勲章が。
(104)

クレインは作品の題名を作中で用いているのだから、それは当然尊重しなければならない。だが、クレインが用いた“a red badge of courage”は比喩表現であるから、実在する勲章のように訳しては台無しだ。そこで、藤井がまず候補に考えたのは『勇氣という名の赤い勲章』だった。翻訳初期は、これをしばらく用いていたらしい。だが、これだとテネシー・ウィリアムズの *A Streetcar Named Desire* を連想させるのでやめた。そこで、『勇氣の赤い勲章』にたどり着いた。編集者からは、「『赤い武功章』ではダメですか」と念押しされたらしいが断った。確信犯ではあるが、いまだにもっとよいのがあったのではと悩むことがあるらしい。

それから、三つ目の挑戦であった大学院生の時に感じた「不思議な描写

の多い小説」(280)の謎は解けたのだろうか。藤井曰く、「当時は文面上の意味を理解するのがやっとだった。今は、表面の理解はできるが比喻への理解はまだまだ。でも、最近クレインの詩に興味が湧いてきた。なぜなら、自負みたいな傲慢さから一気に書き上げるクレインという作家の、謎は多いけれども、文章の向こうで作家が得意になっているポーズには気づけるようになったから。」らしい。だから、現代の「戦争文学」を翻訳する際にも、クレインの現代的な感性が頭をよぎり、人と戦争の関係の本質を掴んでいる作家だと教えられるらしい。クレインからの学びは終わらない。

最後に、藤井が新たに挑戦したいことを聞いてみた。まず、伝統的翻訳規範の修正を挙げた。日本語訳は、今でも「おんな言葉」を過度に強調する。英語では登場人物が男か女かは注意しないとわからないことが多いが、現代日本の保守的翻訳規範では一目瞭然だ。藤井は翻訳のジェンダーレス化に挑み、21世紀的な新たな翻訳規範の構築を考えている。個人的な課題は二つ。まず、翻訳する戦争文学作家の男女比を半々にしたいそうだ。現在は22対2で圧倒的に男が多い。戦争は男の舞台というステレオタイプのイメージを翻訳の世界から切り崩すことを企んでいる。そして最後は、東南アジアの英語作家を発掘し日本に紹介すること。アメリカなどに住むアジア系作家の作品ではなく、フィリピンやシンガポールを生活拠点とする生粋のアジア人の英語作品だ。欧米で執筆活動を行う多くのアジア系作家は白人を頂点としたヒエラルキーの中低層で暮らしているが、英語を駆使できるアジア人作家は大抵の場合地元社会のエリート階級に属している。その彼らが描く世界を翻訳したいとのこと。これまで世界各地の英語作家を手掛けてきた藤井が、今アジアに注目している。

藤井が、現在取り組んでいる作品については敢えて尋ねなかった。敢えて尋ねないことで、藤井の新しい翻訳作品を楽しみにしたいと思った。クレインの古典新訳で示された藤井の研究者としての知見と翻訳者としての技量が、そして藤井の学生時代から続く学びの姿勢が、新たな課題を生む。それが、古典作品であれ現代作品であれ、21世紀の日本翻訳界をリードしていく原動力となるのだろう。藤井の課題は尽きない。そして、自身の家族を含め、自らを取りまく宇宙の全てを恩師と仰いで、藤井光の挑戦は続いていく。